
angelprincess

瑠璃色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

angel princess

【Nコード】

N7029Z

【作者名】

瑠璃色

【あらすじ】

もうすぐ、一端覧祭。

美琴のクラスメイトのクールビューティな沙羅、明るいま玖、ふざけたところがある流人、常時ハイテンションな玲＋美琴が学園都市に嵐を巻き起こす！？

一端覧祭で彼らは伝説を作ることになる！？

オリキャラがダメな方はバックをおすすめします。

作者の語彙はひっじょーに貧しいのでお気をつけください。

クラス（前書き）

はじめまして！

かなり文が苦手なので分かりづらいと思いますがよろしく願います。

美琴視点です。

クラス

「御坂ー！」

ただいま、私、御坂美琴は高校一年生で楽しく？スクールライフを送っています。

一緒に学校に通っているインデックス、統括理事会理事長にいらされた当麻に一方通行。魔術師と戦う時の仲間の元春にエリツアリ、アイテムの面々にLevel5の面々。
楽しくない筈が・・・ない・・・んだ。

確かに魔術師と戦うのも大変だけど、でも楽しい筈なんだ。

長点上機学園。

もうすぐ、一端覧祭がある。

最もこのイベントはいわゆる文化祭で、学校説明会もあるので入学希望者が対象になる。

ここ、長点上機も見学者獲得に力をいれている。

1 - A

「クラスの出し物を決めます！」

委員長がハイテンションで言うと皆もイエーイ！とテンションをあげる。このクラスはエリートというより、バカやっている感じで楽しい。私もバカやってる一人なんだけどね！

「折角美少女と美少年がそろってるんだから、メイド&執事カフェとかは？」

流人の提案にほとんどが賛成し、決定した。あーまた接客担当だな
ーと憂鬱に思っている

「美琴、きつと接客担当でしょ?」

と言われてしまった。声をかけてきたのは日ノ坂 沙羅(ひのさか
さら)。さつぱりした性格でクールビューティーと言われていて
モテている。level4の「風力使用^{エアロシユウタイ}」。

「みこちゃんは可愛いもんね」

この子は祭花 未玖(まつりか みく)。明るくて少し子供っぽい。
歌が上手く、歌姫と呼ばれている。level4の「動物指揮^{アニマルタク}」。

二人も十分可愛いのに……。だって一日に二人のペースで告白さ
れているんだよ? 私達は1Aの美人三姉妹と呼ばれているし。別に
姉妹という訳ではないけど姉妹みたいでこのあだ名は三人とも意外
に気に入っている。美人はいらぬ気がするけど。

「三人とも接客担当だろ?」

そう言ってきたのは柊 流人(ひいらぎ りゅうと)。カフェを提
案した子だ。彼はイケメンなのだが自覚なしで性格はふざけたこと
ろがあるけど、優しかったり、行動力があるいい子だ。level
2の「空間掌握^{ルームアウト}」。

「そうだよ」。未玖も沙羅も接客だよ?」

「それを言うなら流人と美琴もじゃない?」

四人でふざけて言っていたのだが実際に十分後に私、沙羅、未玖、流人揃って接客担当になってしまった。衣装とか接客の練習とか大変なんだよなー。皆、同じことを思っていたようで苦笑した。

一週間後

「流っち！（流人のこと）笑顔！」

「ミクリン！（未玖のこと）料理を落とさないで！」

接客の先生の委員長の注意がどんどん飛ぶ。かれこれ一時間はこんな感じでさすがに・・・

「ずっと笑顔しているっていわれても・・・」

「少し休ませてよー委員長」

未玖は頬を膨らませて、流人はうんざりしているような顔をして抗議する。委員長はしようがないなーと言い、十分の休憩をくれた。

委員長は本名、平野 玲（ひらの れい）、性格はセリフだと真面目そうだが結構テンションが高く、お祭りに目がない。人をあだ名で呼ぶ。level4の「パイロキネシス発火能力」。

「みこちゃんは接客上手いなー」

「玲だって上手いじゃん。前、クレーム来たときとか凄かったよ？」

玲とは気が合う。玲も常盤台出身でどうしてもただ真面目なクラス

に馴染めなかつたらしい。私も堅苦しいのとか、真面目なだけなのはつまらないと思う。今は凄く楽しいけどね。玲も楽しいみたい。

「みこといるかな？」

私を訪ねてきた人はインデックスだった。滅多に私のクラスに来ることなんてないのに。なんのようだろう？と不思議に思っている。クラスが騒がしくなる。これも銀の姫君と呼ばれているインデックスの力なんだろうなーとのんきに思っている。

「みこと！何ボーっとしてるんだよ？」

「あーなんでもない。で要件は？」

滅多にこないインデックスの用なんて思いつかないし、なにか深刻なことでもあったのかな？と思っていたのだが

「みことおーとうまがとうまがね鈍くて気づいてくれないんだよ！」

たいしたことでは無かった。深刻に思うだけ無駄だったなーと呆れちゃった。インデックスをほっとく訳にもいかず話を聞いたのけど、結局勘違いし合っていただけだったので、

「素直に話しなよ？うち使っでいいから」

とだけアドバイスし、戻った。まったく二人とも素直じゃないなー。青春おくってますなーと思いつながらアイテムの面々に連絡する。

『インデックスと当麻が素直になんないからちよろつとてこ入れない？』

能力の設定（前書き）

オリジナルの能力である、未玖の「動物指揮」アニマルタクトと流人の「空間掌握」ルームアウトの設定です。

能力の設定

「アニメタルタクト動物指揮」

動物を従えることができる。

動物の声が聞こえ、level次第で動物の巨大化、最小化が出来る。

その動物が懐いているかどうかも関係し、巨大化などは自分のペットの方が成功率は高い。

未玖の場合、イメージ（自分だけの現実）をより鮮明にするため、巨大化させたりするときは掛け声のようなものを言う。

例「アニメタルタクト動物指揮！ dynamics、フォルティッシモ！」

未玖は歌が得意な為、この言葉は音楽用語で、意味は未玖が強弱と言う意味の dynamics を強弱でなく、大小と捉え、フォルティッシモは強くと言う意味だが大きくと捉えている。なので大小＝大きさを変えると言う意味で言っていて大きく＝大きくするという意味で言っている。

「ルームアウト空間掌握」

空間の把握、空間を創ることが出来る。

空間の把握はどこに誰がいて、その空間の大きさはこうということに分かる。

空間を創るといふのは意味は違うが、ハルヒのつくりだすようなもので、自分の創る空間の大きさの範囲に（自分を中心として）いるとその空間に入る。本人は入ることも入らないことも出来るが今の

流人のlevelでは不可能。創れる空間の大きさも制限がある。
空間を創るのを応用して足場を作ることが可能。

能力の設定（後書き）

分かりづらくてすみません

統括理事会（前書き）

今回は統括理事会、つまり上条さん達、ヒーロやI e v e 1 5のお話です。

訂正とお詫び

美琴達の学年ですが正しくは一年生でした。
誠に申し訳ありません。

統括理事会

統括理事会

現統括理事会は理事長、上条当麻、一方通行、理事の浜面仕上、麦野沈利、滝壺理后、土御門元春で構成されている。美琴は来期統括理事会採用が決定していて、今も手伝わったりしている。

このメンバーはよくも悪くも常識人が皆無だ。皆、どこか常識が欠落している。（一方通行達に言ったら怒られそうだが）

だからよく、行事の内容が変わる。今回も一端覧祭は入学希望者向けの行事だから外からの見学に来るのとまとめてしまおう！となった。要するに仕事がしたくない、めんどくさい、のだ。よって結局理事長は仕事が増える訳で。

当日の来場者数を予測して、IDを発行したり、ゲートの機械を多く導入したり、発表をしたり。とにかくやることが多い。（サボリ気味な部下の所為でもある）

「りじちよーこれサイン」

「へいへい」

「理事長！予算案こんな感じでいいかじゃー？」

「ん、OKだ」

「当麻、一端覧祭のプランまとまったよ」

「悪いな、御坂」

「うだー休みてえ」

「ちゃっちゃとまとめるオ、浜面ア」

当麻が美琴に渡された一端覧祭のプランを見て

「御坂、このテレビで放送する超能力を使った出し物って長点上機と常盤台ってなってるけどどうやって決めただ？」

「抽選。これからその承諾貰いにいこうと思ってたんだけど」

美琴も苦笑している。抽選で五本指に入る学校が二つなんて偶然なのだろうか？

だが美琴は何事も平等に行うので嘘をついたとは思えなかった。当麻はま、いっかと承諾した。

「承諾してもらいに行くなら誰と行くか？」

さすがに高校生でどちらにも在籍していた美琴が交渉に行って大丈夫だろうか？

長点上機の理事長は事情を知っているのでまだしも常盤台といえはお堅いんじゃない。

なので当麻は聞いてみたが（ちなみに当麻は常盤台の理事長には会ったことがない）

「大丈夫よ」

けれど心配だったので結局

「お前が言い出しつぺだろオが。お前が行ってこい」

と一方通行に一刀両断され、美琴、当麻で行くことになった。

学舎の園

二人は待ち合わせの時間までかなり余裕があったのでぶらぶらしていると言をかけられた。

「御坂さ〜ん！」

美琴の後輩で柵川中学の初春飾利と佐天涙子と常盤台中学の白井黒子だった。

案の定、美琴は黒子に抱きつかれそうになったが当麻らと鍛えた体で瞬間移動のような驚異的な動きでかわし、手のひらで軽く殴った。

「御坂さんと・・・どちら様ですか？」

「ああ、統括理事会理事長、上条当麻だ」

「アハハ！それ業務用挨拶になってない？」

美琴はいつもの癖で統括理事会理事長と言ってしまった当麻を笑いつつもフォローするように

「統括理事会理事長補佐官、御坂美琴です」

と業務用の挨拶をする。しばらく三人はポカーンとしていた。

「御坂さん統括理事会に入ってるんですか？」

「ん、まあね。来期から正式に入るんだけど」

しばらく会ってないうちに随分と色々変わったんだなーと思い、少し寂しく思った三人だった。

常盤台中学

当麻と美琴は三人と別れ、常盤台中学に来ていた。

もちろん、こんな知名度のアップする話を断る訳なく、承諾してくれ、既に能力を使ったイベントを考えていた為そのまま実行委員の生徒と打ち合わせしていた。

常盤台はパフォーマンスショーをやることになっていて準備も終わっていたらしい。

「まず禁止事項は精神系の能力、人を使う能力ね。注意してほしいことは能力と能力で科学反応が起きないか。書類を見る限り大丈夫そうだけど最終確認に暇な時来るから」

それだけ言い帰った。長点上機はもう承諾してもらっており、インデックスを落とす方法について教えたりしながら戻ったのだが、

「みこっちゃん〜」

なぜか皆、酔っていた。とりあえず個室まで運び片づけていたら、ワインとシャンパン、日本酒の空ビンがたくさんおちていた。もちろん、起きてから美琴と当麻が一時間説教した。もちろん皆、反論した為、問答無用で正座&一日言うことを聞くと約束させられた。。。

統括理事会の天気は晴れ時々怒鳴り声だった。。。

常盤台中学（後書き）

酔っぱらって怖い・・・。

麦野とか酔っぱらったらこんなことしちゃいそうだなーと思います
て。

次回からは真面目に一端覧祭本番スタートです！

感想お待ちしております！

一端覽祭一日目1(前書き)

前回のお話はキャラ崩壊していたので直しました・・・。
すみません！

一端覧祭一日目1

「流っち！カフェの材料は？」

「完璧。保存しておけるものは作って置いてある」

「ミクリン！出し物の方は？」

「後は演出の再調整だけだよ」

今日は一端覧祭当日。ここ長点上機も準備で騒がしかった。もちろん1-Aもだ。というかここが一番騒がしい。玲の熱が周りに引火し、相当燃えている。沙羅、美琴には微笑ましくも少々うるさい感じがするが。

「あー玲、私用事があるから抜けるね。先生には言っているし、明日はちゃんとやるから。ごめんね」

玲が親指を立ててOKのサインをしたので美琴は常人では出せないようなスピードでどこかへとんでいった。

「まったく、明日は沢山働いてもらうからね？みこちゃん」

玲はよしっ！と気合を入れ直し、皆に指示を出していった。

統括理事会

「今日は一端覧祭だ！しっかりやれよ！まずスケジュールだが」

「八時に見学者の迎え、その後学園都市についての説明、九時から開催宣言を行います。」

各理事はパトロールに行つて貰います。風紀委員も一緒です。今回は177支部に協力してもらいますので時間や場所についてはそちらで確認してください。

理事長はテレビのインタビューが一時からありますので早めに昼食を済ませ、着替えてください。それまでは基本自由ですが器物破損、喧嘩は慎んでください。それと携帯を必ず持ち歩くようにしてください。」

美琴が完璧に今日の予定を話す。皆嫌そうな顔をして美琴を見る。すると美琴はにこおと笑いかけ、

「嫌だとか言う苦情は聞きませんよ？それとも殺されたいのですか？」

と言うので皆顔を真っ青にして首を横に振る。そのまま解散となった。見学者の迎えは美琴、当麻となった。容姿、性格を考えて決まったのだがやはりこの二人しか適任者が居なく、また美琴と当麻になった。

見学者の待つ場所

大きなバスが止まっている駐車場に並んでいる子供たち。選ばれたのは応募で当たった子、来年学園都市の学校に入学予定で入学する予定の学校に招待された子、成績優秀な為学校に推薦された子などだ。

そこへ大きなリムジンが現れる。出てきたのはスーツに身を包んだ

可憐な女性となぜか父親に似通った物を感じる男性。

「ようこそ、学園都市へ。統括理事会理事長、上条当麻だ。よろしくな」

「統括理事会理事長補佐官、御坂美琴です」

簡素な挨拶を済ませ、子供たちはバスへ乗せられる。次についた場所は大きなホール。だが子供たちは初めて見る科学の街に心を奪われていた。見たことない機械が街中を回ってる。外じゃ考えられないような近未来的な数々の建物。一端覧祭の準備で慌ただしく走る沢山の生徒達。

当麻と美琴は微笑んでしようがないとしばらくその光景を眺めていた。

「そろそろ中に入りましょうね」

美琴の呼び掛けで先生らしき人物が皆に呼びかける。ここは学生の街。学校も無数にあるので先生にも勉強になる場所なのだ。よって、先生も研修という形でいるのだ。

ホールの中へ全員入ったことを確認すると美琴はマイクを持ち、学園都市についての説明を始めた。

「ここは科学の街。警備ロボットが徘徊していますが、触らないようにしてください。怖い人に話しかけられたら私かこのお兄さんと呼んでください。後、このIDはこの街でのあなたたちの身分証明書です。絶対になくさないでください」

そしてIDをくばる。

「質問はありますか？」

「はい！」

元気よく手を上げた男の子を指す。

「お姉さんはどのくらい強いの？」

「んー、このホールを壊せるくらい、かな？」

さすがに一人で軍隊と戦えるとは言えなかったがそれでも子供たちはすごいと思っただらしい。質問を終え、教職員のみ別室に呼ぶ。

「この街には超能力があります。それ故に格差のような物が出来てしまっています。襲われたり、銀行強盗が起きたりしています。昔と比べて減りましたが……。この街の平和を守っている風紀委員や警備員がいますので何かあったらすぐに連絡してください」

番号を教え、その他の注意することを話し、観光に出発することにしました。

一端覽祭一日目1（後書き）

一日目が思ったより長くなってしまったので分けました。

どうしよう・・・見学者の中にコナン（名探偵コナン）達を入れた
い・・・。

もしかしたらifとしてつくるかもしれません。

見学者にコナン達入ってるバージョン（笑）

一端覽祭一日目2

バスから見える風景にキヤーキヤー言っている子供たちを見て

「なんか懐かしいな」。上条さんも昔はこんなだったけな」

「言ってる事が爺さんくさいですよ？」

少なくともまだ十代の人が言う台詞ではないだろう。当麻はそうかあ？と言っただけだった。

「て言うか敬語じゃなくていいぞ」

「そう？じゃあいつもどおり喋るよ」

二人は見慣れた景色に反応することもなく、パトロール大丈夫だろうか？とかインデックスのことを話していた。

「早くインデックスに告白したら？見てるこっちがじれったいのよ」

「上条さんはどーせ不甲斐無い男ですよーだ」

いじける当麻をよそに美琴は目の前の子供たちを見つめる。美琴は私とは正反対ね。私はいつから無邪気じゃなくなっただけ？と物思いに耽る。

とんとん

「おーい御坂？開催宣言の会場についたぞ？」

「ごめん、ちょっと考え事してて」

上条と美琴が向かったのは放送室のような場所。すでに一方通行が待っていた。

「遅かったな三下ア」

「わりいわりい。じゃ始めますか」

美琴がスイッチを押し、レバーを上げる。

『ただいまより一端覧祭、開催宣言を行います。まずは上条理事長からのご挨拶です。』

『統括理事会理事長、上条当麻と統括理事会理事長、鈴科真だ。皆さん、今日は一端覧祭です。守るべきことは守って、大いに盛り上げられ！けれどもくれぐれもやりすぎないように！』

美琴が頭を抱えるが、一端覧祭は学生の行事だからこそ上条も羽目を外せる。だが美琴の頭痛の種なものには変わりないらしい。これには一方通行も同情的な視線を送っている。

『次に鈴科理事長の開催宣言です』

『これより、一端覧祭を開催することを宣言する』

遠くからオー！と言う声やがんばるぞ！と言う声が聞こえてくる。三人は微笑み、こちらもコツンと拳をぶつけた。

「統括理事会理事の浜面仕上だ。少しの間だがよろしくな」

「同じく統括理事会理事の土御門元春だぜい。よろしくな」

「麦野沈利だにやー」

「たきつぼりこう。よろしく」

統括理事会の面々の自己紹介が終わると

「固法美偉よ。よろしくね」

「白井黒子ですの。よろしくですの」

「初春飾利です。よろしくお願いします！」

理事会のメンバーは特に関心がないようで浜面だけが必死に覚えようとしていた。そんな浜面に統括理事会の面々はこれだから馬鹿面は・・・とかドンマイ的な視線を送っていたりしている。そんな中元春が

「白井・・・ああ！ミサヤんとこの変態の後輩だにやー！」

「ああ、御坂が近づかない方がいいわよって言ってたな」

しばらく皆黙ってしまふ。そんな沈黙を破ったのは電話だった。白井がスピーカーホンにして出る。

「もしもし、風紀委員第177支部ですけど「ちよつと土御門・・・」お姉様！どうかされたのですか？」

そんな白井の呼びかけが聞こえなかったかのように怒鳴り声が響く。

「土御門・・・人の服を！全部メイド服にすんなあ！忙しいのよ！あの馬鹿どもが色々やらかすし、だつて二人して自動販売機壊すわ、睨んできた不良を殺しかけるわ、勝手にどっか行くわ・・・」「ご愁傷様、ミサヤン」よし土御門、舞夏に言いつけとくわ」

そう美琴がいうとサア・・・と土御門の顔が真っ青になっていく。それにしても器物破損に殺人未遂、行方不明と白井、初春、固法は美琴つてなにもの？と思いかねないような事だ。まあやっているのは当麻と一方通行だが。

「ミサヤン何でもするからそれだけは勘弁！！」わかつたわよ。こんど当麻達と残業ね。もちろん残業手当もなしよ？」「はい・・・」「黒子たち、うちの馬鹿どもの事よろしくね」

プツツ・・・電話は切られてしまった。

白井たちはこれからどうなるのか正直怖かった。

数時間後

結局、酷かった。誰かさんはずっと電話でメイド談義をしてるわ、誰かさんは売られたけんかは買いまくつて殺しかけていた。後で皆、五時間程美琴にこつてり絞られ、皆で仲良くサービス残業だったとか。美琴は全員で謝りに行き、その上、一個数千円のお菓子まで謝罪として渡したとか。（もちろんお支払いは一方通行のクレジット

カードで

一端覽祭一日目2(後書き)

どうでしたか・・・?地の文が難しい・・・。
感想お待ちしております。

一端覽祭二日目1（前書き）

ついに一端覽祭らしく・・・！

一端覽祭は何日間か分からないので二日間にさせていただきます。

ちなみに11月に開催される予定ですよ（確か）

一端覽祭二日目1

長点上機学園

11A

美琴はロッカーの前で呆然としていた。なぜなら、メイド服が凄まじかったからだ。

超ミニの丈に五段フリル。大きなリボン。

怒りを通り越してもはや呆れていた。昨日さぼったからか？などと考えていると未玖がやってくる。未玖も同じ格好だった。

今日は統括理事会のメンバーもやることなく、来ると言っていたので最悪だ。

「みこちゃんそんなに沈まないでよ。早く行こ？」

未玖に手を引つ張られる形で教室にたどり着く。クラスメイトがおーと感嘆の声を漏らしているのすら気付けないほど美琴の気分は落ちていた。未玖、玲はニコニコしていて、沙羅、流人は苦笑している。

時間は待つてくれず、すぐに開店時間を迎えた。

「いらっしやいませ。何名様ですか？・・・あ」

「えーと五人？」

「馬鹿か。六人だろオが」

言うまでもなく、最も会いたくない人物ワースト10に入る人物達

だった。

「こちらへ」

今は学園祭、今は学園祭・・・美琴はそう念じ、精巧に作られた作り笑顔でニコと笑いながら席へと案内する。

「ご注文は？」

「アイスコーヒー」

「鮭弁当」

「ないです」

「メイド特製パフェ」

と好き好きに注文していく。どんどん作り笑顔が黒くなっていく美琴に上条と浜面は同情的な視線を送り労いの言葉を掛ける。小さくありがとだけ言い、別のテーブルに移動していった。まあ特に何も無く、終わったからよかったとだけ言っておこう。

「いらっしやいませ！」

「御坂さん！来ちゃいました！」

初春、佐天、白井が訪れた。ちょうどお客さんもいなかったの少し話していると

「美琴、友達？」

沙羅に声を掛けられる。おそらく、美琴は統括理事会で忙しく、あまり友達と遊ばないのを知っているからだろう。未玖、沙羅、流人、玲は美琴が統括理事会に入っていることを知っているのではおさらだ。

「うん。後輩よ」

「そうなの。珍しく美琴が私達以外の人と話してるから少し驚いた」

「でもみこちゃんだって友達ぐらい居るでしょ？あ、始めまして〜祭花未玖だよ。よろしくね！」

未玖までやってくる。初春たちはしばらく驚いていたがよろしくと返した。するとお客がいなくて暇だからか流人もやってくる。

「なにはなしてんの？こんにちは。柊流人だ」

「私も自己紹介しなきゃね。日ノ坂沙羅よ」

学校のことや最近の出来事、最近出来た友達のことを話しているとお昼時になり始めたので、別れた。1-Aのカフェは人気で初春達と話してた時以外は休む暇もなく、忙しく働いた。

そしてもう一つのイベント、そう、テレビが取材に来る出し物だ。常盤台は午前にやり、長点上機は午後に行うことになっていたのだ。やるのは・・・演劇。

いつも見ているものがけれども超能力で凄くさせられるものならこのへんが妥当だろうとの意見で決まった。いつも見ている物にしたのは凄さを分かりやすくするためだ。やるのは『シンデレラ』。

配役は

シンデレラ・・・御坂美琴

王子様・・・柊流人

継母・・・日ノ坂沙羅

意地悪なお姉さん・・・祭花未玖、神裂桃歌（インデックスの偽名）
神裂、当麻の名前から（

魔法使い・・・絹旗最愛

となった。もちろん指導は玲。

さてどうなる・・・？

一端覽祭二日目2

「シンデレラ、お皿を洗いなさい」

「シンデレラ、洗濯をするんだよ」

シンデレラは継母とお姉さんにいつもいじめられていました。かわいそうなシンデレラは舞踏会にも連れていってもらえませんでした。

しかし魔法使いが魔法をかけてくれました。

シンデレラの衣装が一瞬で変わる。これは座標移動だ（結標協力）。そして馬車は空を飛ぶ。これはオリジナルアレンジで念動能力を使っている。

パーティーも空間移動で一気に飾り上げ、シャンデリアは念動能力で宙に浮かせる。歌姫と呼ばれる未玖はピアノも上手く、ワルツを弾く。

王子がシンデレラの手を取る。二人は踊り、楽しい時を過ごしたが十二時の鐘がなる。シンデレラはガラスの靴を残して帰ってしまう。

そして王子様がガラスの靴を持ってやってくる。シンデレラが履くとあらぴったり！

座標移動でドレス姿に変わり、王子様の告白を受け終わる筈だったのだが告白を受けてすぐに美琴がつまづいてしまう。

とつさに流人が美琴の手を掴み、引き寄せキスする。

ちゅっ

小さく音を立ててキスする。二人はその後何も無かったかのように振る舞った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7029z/>

angelprincess

2011年12月31日23時51分発行